風のまつり

後藤 竜二・作　依光 隆・絵

風のまつり

後藤竜二・作
依光　隆・絵

講談社

風のまつり

後藤竜二・作

N. D. C. 913　昭和44年　206 P　21.5cm

〈著者の略歴〉

1943年　北海道で生まれる。

1966年　早稲田大学英文学科卒業

1967年　「天使で大地はいっぱいだ」（講談社）

昭和43年10月4日　第1刷発行
昭和44年7月4日　第5刷発行

著　者　後藤竜二

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2―12―21　郵便番号112

振替口座 東京 3930 電話東京(942)1111

印刷所　慶昌堂印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

定　価　500 円

© 後藤竜二 1968年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

(分)8-0-93(製)188395(出)2253 (0)

《もくじ》

プロローグ……5

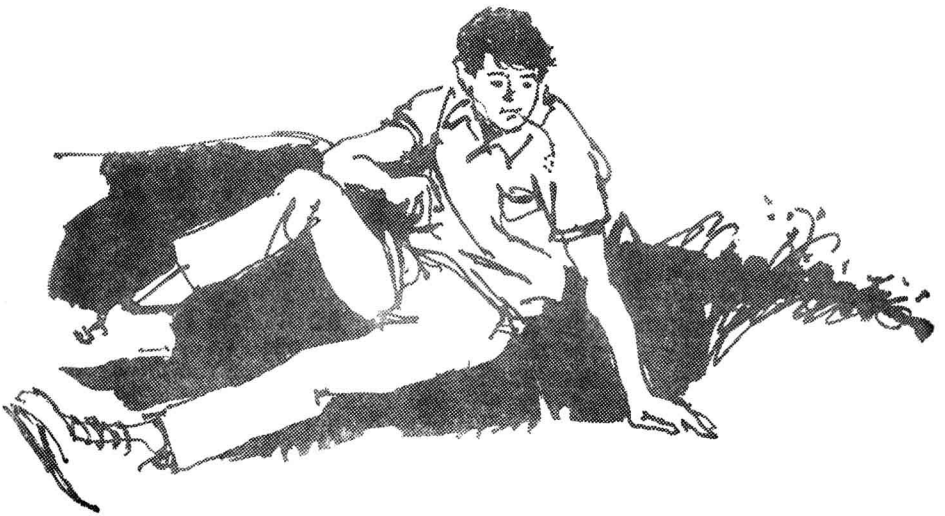
第一章　ゆがんだ教室……12

1　ホームルーム……12

2　ひとり……21

3　夜の散歩……32

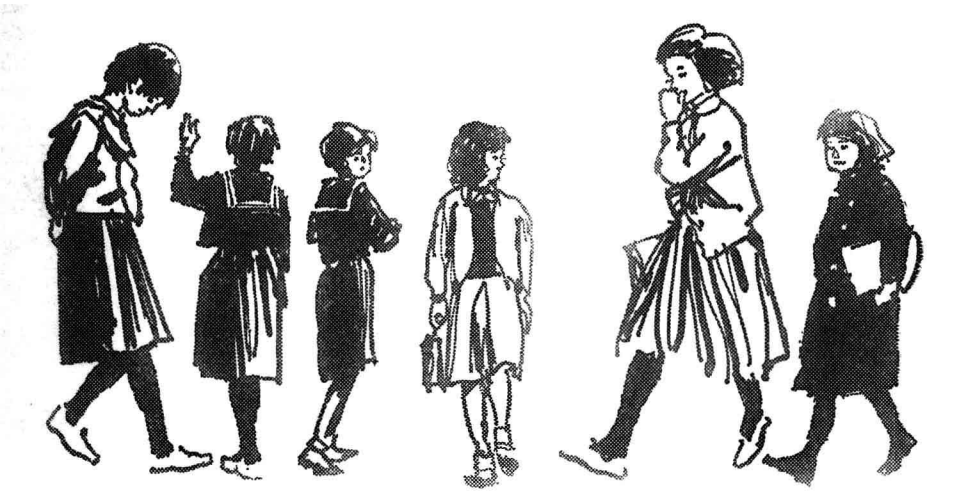
4　家……43



第二章　級友……51
1　けんか……51
2　早退……56
3　教師と生徒……63
4　相談室……67
第三章　のらいぬ……71
1　ばかと天才とウルトラC……71
2　青ざめたわらい……76

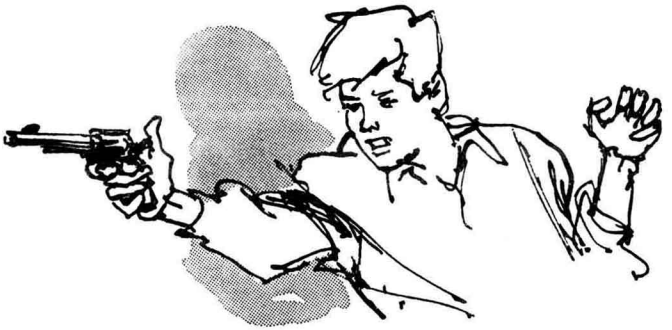
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3 よごれた手……84
4 見えない夢……92
第四章 敗北と勝利……102
1 祭りの日……102
2 おたけび……114
3 陰謀……127
4 栄光のおどる足……136



第五章　遠い旅……152
1　奇妙な手紙……152
2　緊急生徒大会……159
3　友だち……173
4　朝……180
エピローグ……193
あとがき……204

プロローグ



リボルバー45を、左手のひとさし指で二、三度まわしてぴたとかまえ、黒光りする銃身を見つめて、完はにやっとわらった。

——こいつはおれの宝さ。

リボルバー45。六連発。プラスチックの弾丸が飛び出す。

二、三ミリの板ならぶちぬいてしまう。いまではもうどこにも売ってはいない。市販されて二週間とたたないうちに、危険物として販売を禁止されてしまったのだ。

——ばかめ。時すでにおそし、さ。

とくいげにリボルバーをまわし、弾倉を調べてから両手をだらりとさげ、両足をふんばってへやの中央につっ立った。

「はっ。」

小さくかけ声をかけて、二メートルほどはなれたかべの板の的に、〇・四秒の早うちをくらわせた。直径十センチばかりの円の中に深くくいこんだ弾丸を、指のはらでいとおしむようにさすってみた。

「完さん。」
ドアの外で声がした。
「あいよ。」
答えて完は、拳銃をかくそうともしない。
「なんです、そのお返事。」
母が、いきおいよくドアをあけてはいってきた。
「まあ、またそんなおもちゃで遊んでいたのですか。いつになったら――。」
「ああ、わかったよ。」
母のことばをさえぎって、完はひらひらと手をふった。
「いつでもいうけど、わかってなぞいないじゃありませんか。」
「わかった、わかった、わかったよ。」
母はいまいましげに、完を見あげた。
「ほんとに、からだばかりは大きくなって。」
「ね、ママ。」
ねこなで声でいって、完はにやにやわらった。
「あんまりおこるとさ、またヒステリーの発作がおこるよ。」

「なんですって。」
「ほらほら。」
完は母の着物のかたを、かるく平手でたたいた。
「わらうかどには福きたる。おこるかどには死に神きたる、と。」
さいごまできかず、パシッと母は完の手をたたいた。
「さっさと勉強なさい。」
「え？　なんの勉強でしょうか。」
「いいかげんになさいよ。」
「学校のおべんきょうなら、もうなさっちゃったんですけどねえ。」
「うそおっしゃい。」
「あ、信じないんだなあ。」
——あなたのむすこを信じなさい。——
口ずさみながら、完はつくえの方に向かって歩きだした。
「およしなさい。そんな下品な歌。」
母が、かなきり声をあげた。
「ママ、ま、きいてちょうだい。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

完は英語の教科書を手に取って、二、三度ひらひら宙でふり、それからゆっくり読みはじめた。
「レッスンセブン。」
コロンブスのアメリカ大陸発見の物語。気どらない完の声が流れるように進み、ぱらりとページをめくると、ちらと母を見やって、にやっとわらった。そこからきゅうに速度があがり、またたくまに三ページの文章を読みおえた。
「ズィ　エーンド。」
おどけたゼスチュアでしめくくり、教科書をつくえの上にほうりだした。
「ゼ の発音が、まだ完全とはいえません。」
母は早口にいって、すこしどもった。
「わかったよ。おつぎは数学。」
完はひとさし指をまげて母をよんだ。
「これが問題。これがおれのやった式と計算と答え。」
「また〝おれ〟だなんて。あのね、完さん、あなたこのごろ――。」
「わかった、わかったよ。問題の本質とはずれるけどさ。ま、ママもよくわかったろ？」
「なんのこと――。」
「おれがけっこうおべんきょうやってんだってことさ。にぶいなあ。」

めがねをなおして、母は完をにらみつけた。
「予習や復習をしたくらいでいばるとは、大まちがいですよ。あなたも来年は受験なのですからね。藤山さんのアキラさんをごらんなさい。どんな試験でも、つねにトップじゃありませんか。それにくらべてあなたときたら――。」
「こんなめぐまれた環境の中にいて、いつもいつも五十番付近だ、と。」
にやにやしながら、完は母のことばをひきとった。
「おれさ、わかるなあ、ママの気持ち。」
「――なんて子でしょう。」
母の声がかすれ、細い指がかすかにふるえはじめた。
「悪かった、悪かった。あやまるよ。これからは、もっともっと、四当五落でがんばります。ちかいます。」
直立不動の姿勢で敬礼した。
「ママとは、そんな調子でしかお話ができないのね。」
近眼鏡の奥の母の目が光った。
「おききなさい。」
完はちょっとうつむいて、えんりょがちにため息をついた。

「なんでも人に先んじなければいけません。一番にならなければいけないのです。一番と二番との差は、どんなばあいにおいても、越えがたいものなのです。一生を下積み生活でおわりたくないなら、もっとやる気をおこしなさい。」

「――はい。」

「パパのところにやってきては、いつも卑屈な態度をしている人を知っているでしょう。もう停年も近いというのに、まだただの平社員ですよ。あんなふうになりたくないと思ったら、もっともっとよい成績をとるよう努力しなきゃいけませんよ――。」

母の説教は、なかなかおわりそうにもなかった。

――調子にのるんじゃないよ。

完の足が、ひょこひょことおどりはじめた。

――おれをいらいらさせないでくれよ、たのむから。

すんなり伸びた長いすねをびんぼうゆすりさせながら、完はうつむいて母の話がおわるのを待っていた。

第1章
ゆがんだ教室

1　ホームルーム

月曜日。長くてたいくつな朝礼のあとのロング＝ホームルームは、東中学のどのクラスも、小試験や受験指導の時間にかわってしまっていたのだが、三年Gクラスだけは例外だった。

新任の若い教師「ワンちゃん」のニックネームを持つ犬丸先生が、その時間に内職することをかたく禁じていたからである。

だがそこでも、生徒自身が進んで議題を提出するというようなことは、ほとんどなかった。いらいらしたり、つっかえたり、どもったりしながら、ワンちゃんが時間いっぱい説教じみた話を続け、生徒たちは教師に見られては困るようなことを、ノートの切れはしに書いてそっとまわしあい、ひそかにたにたとわらうことで、うっぷんとたいくつをまぎらせるのが、いつものこととなっていた。

しかし、模擬試験をまぢかにひかえた六月二十四日のホームルームは、すこしばかりいつもとは事情がかわってしまったの

だった。

「話す」

ホームルームが始まるとすぐに、クラス委員の藤山アキラが挙手して立ちあがった。

「ぼく、クラス委員をやめたいのです。」

藤山のとつぜんの発言に、教室はいっしゅん静まりかえり、すぐにいっそうさわがしくなった。

「静かに。」

万年議長の森山新平が、よく通るバスでいって、教室じゅうをぐるりと見まわした。

「理由は？」

「いわなければならないのですか。」

「もちろんです。」

新平は即座に答えて、アキラの顔を見守った。

藤山アキラはつくえのはしを両手でにぎってすこし前かがみになり、新平とワンちゃんをいどむように見つめた。

教壇の横のいすに足を組んですわったワンちゃんは、むやみに出席簿をあけたりとじたりするばかりで、視線をあげようともしなかった。

藤山アキラは、つくえの上の一点を見つめて考えこんでいたが、やがて静かに話しはじめた。

「ぼくはいやになったんです。クラス委員なんて、けっきょくクラスの小使いにすぎないんですからね。

運動会、学校祭、クラス会、そうじ当番のせわ、ときには小試験の採点までさせられる。そのほかの小さな雑用まではあげたくないけど、とにかくぼくは、この小使いの仕事がいやになったんですよ。

どういう理由からか知らないけど、みんながぼくを選んだ。クラス委員という名はちょっぴり魅力的だったし、みんなが喜んでくれると思ったから、ぼくもその気でがんばってみようとした。

でもさ、そんなことはてんで関係ないんだということが、ようやくぼくにはわかったんです。

ぼくがみんなのためにクラスの雑用をしているすきに、みんなは自分ひとりのことしかやっていないんだ。そしてぼくがちょっとへまをすると、自分たちのことはたなにあげて、クラス委員のぼくひとりを責める。

みんなの利益のために、ぼくひとりがぎせいになってあたりまえ、というしかけになっているんだ。みんな自分ひとりのことしか考えないんだ。

ぼくがいまやめれば、みんなからどんなに非難されるかくらいはわかっています。きっとみんなは、ぼくを利己主義者とよび、がり勉とののしるでしょう。でも、ぼくはちっともおそれはしない。——ぼくは、これから堂々と、がり勉の利己主義者になることにきめたのです。」

アキラは着席した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com